

歴史に見る血管病理解の変遷

(The paradigm shift in our understanding of vascular diseases)

東海大学 脳神経外科

キッティポン スィーワッタナクン

Kittipong SRIVATANAKUL, Tokai University School of Medicine

現在われわれが当たり前のように日常的に診断、治療を行っている疾患は各種診断装置があって初めてわかるものが多い。これらの疾患はいつから正しく診断され、理解できるようになったのか、我々が現在理解しているつもりでも実はまだ病態についてまだ理解が十分でなかったり、誤解がないとは言い切れない。いくつかの脳血管障害の発見、解明までの歴史を振り返る。

今回のテーマである静脈系に関係する病態を中心に解説するが、静脈という構造物はGalenの時代から「循環」が存在せず、食物が栄養となり、体に送られる構造物と考えられた。ルネサンス期になり、Vesaliusの研究をきっかけに正確な解剖の知識が蓄えられるようになったが、Vesaliusの解剖図でも動脈と静脈が区別できていたとは言えない。Vesaliusの孫弟子とも言えるHarveyの”De motu cordis et sanguinis in animalibus” (1628)の時代までは循環に対する理解はなされていなかった。19世紀の血管注入標本による研究(Breschet(1832), Trolard(1868)など)や20世紀前半の血管撮影の発明などにより、病態を理解するためのツールがようやくできた時代になってきたと言えよう。

紀元前よりvascular malformationという言葉は使われていたが、上記循環に対する概念がないため、シャントという意味を持たず、あくまでも外見上の名称である。現在のarteriovenous malformationと呼ばれるまでにおそらく数十種類の呼び名があり、一部には別の疾患も混同され、含まれているものと推測される。剖検で頭蓋内のAVMが報告されたのは1880年代と考えられる。血管撮影の時代までに実に100以上の頭蓋内AVMの報告があるが、一部には現在で言う硬膜動静脈瘻(dAVF)が含まれており、最も古いものはRizzoliによる報告で(1873)あるが、硬膜の本来のものかAVMのdural supplyによるものかははっきりしない。血管撮影での報告はおそらくVerbiestが最初であるが、これが発表された1960年代初頭のフランスではこの状態を”Anévrysms artéreo-veineux”と呼んでいる。Aminoff(1973)によりまとめてレビューされ、ある程度症例の蓄積があると考えられた。Djindjianのテキスト(1978)ではmeningeal arteriovenous fistulaと命名されており、当時の経験が36例程度と少なかったが、既に静脈のドレナージのパターンによる分類がされていた。(Djindjianでさえもその10年前はこの理解ができていたかどうか疑問がある)この概念をきっかけにこの病気に対する基礎ができ、症例の蓄積でさらに病態の理解が深まっていき、我々が活躍する時代になっている。しかし、よく考えるとまだ病気の理解の歴史は浅く、まだ理解が完全ではないこと、場合によりその概念を修正する必要があるのではないか何十年かしたらそのようなことが起きてもおかしくないと思いを振り返るとそう考えたくなる。上記の例よりも複雑なのは現在でいうdevelopmental venous anomalyの存在である。血管撮影での最初の報告は1968年のConstansによるものであるが、やはりangiomes veineuxという病的な意味のangiomaが使われている。1980年代まではangiomaまたはmalformationという位置づけで扱われてきた。これは形態による判断が病的意義を与えてしまったという経緯がある。Lasjaunias(1986)が機能面に着目し、病的な構造物という概念を払拭する意味でDVAという名前を用いたが、上述のdAVFよりも歴史が浅く、今後の新たな考えの修正が出てくるのが楽しみでもある。

このように常に疾患での形態論が先行する傾向がある、形態論がその後病態(機能面)で修正されている経緯がある。画像診断は日々進化しており、画像からさらに病態を読み解くことが病態の理解への一番の近道なのかもしれない。